

7病防 第 6 号

平成7年5月17日

東 京 都

平成7年度 病害虫発生予察特殊報(第2号)

病害虫名 : キウイヒメヨコバイ(仮称)

*Alebrasca actinidiae* HAYASHI et OKADA

対象作物 : キウイフルーツ

## 1 発生経過

平成6年10月、北多摩のキウイフルーツ(品種:ヘイワード)に種名不明のヨコバイが多発しているとの常法が担当普及員より寄せられた。

現地調査により採取した標本が1991年に神奈川県から送付された標本に酷似していたため、同県病害虫防除所に同定を依頼し、その結果、キウイヒメヨコバイであることが確認された。本種は同県小田原市で平成3年8月にキウイフルーツで発見され、林・岡田(1994)により新属新種として記載された。

当該園では成虫が激しく飛び交い、吸汁のため葉面全体がかすり状となり、葉枯れや落葉を生じている。

また、約100メートル離れた2つの園でも成虫の部分的な少発生が認められた。発生経路については現在のところ不明であるが、北多摩一帯にはキウイフルーツの栽培面積は相当あり、今後発生地域が拡大することも考えられるので注意が必要である。

## 2 学名、形態及び発生生態

(1) 学名 : *Alebrasca actinidiae* HAYASHI et OKADA

(2) 和名 : キウイヒメヨコバイ(仮称)

(3) 形態

成虫は体長3~4mm、雌は黄白色、雄は前翅の基方3分の2が緋紅色で日時を経て濃色になる。後翅は翅脈のみが赤い。チャノミドリヒメヨコバイに似る。

幼虫は、体長1~3mm、ふ化当初は白色で後に黄白色になる。胸部背面に3対の黒色紋があり、大きくなると目立つ。

(4) 生 態

神奈川県病害虫防除所の調査によれば、成虫は5月から11月に見られ、年4回程度の発生経過をたどる。卵は葉裏の葉脈内に産み付けられ、ふ化した幼虫は葉裏で直ちに吸汁・食害をはじめめる。

幼虫は、非常に活発に運動するが、他の葉への移動は少なく、そのため幼虫が多発すると被害が激しくなる。

成虫も動きは活発で、主に葉裏に寄生し吸汁加害する。落葉とともに園から見られなくなる。

越冬は卵で行われ、枝の芽基部に産み付けられる。翌年4月頃から幼虫は発芽して展葉まもない葉上に現れる。

(5) 寄主植物

キウイフルーツに寄生し、それ以外の植物では寄生は確認されていない。

(6) 被害(添付写真参照)

被害は、葉裏に寄生する成虫及び幼虫の吸汁加害によっておこり、葉面が白くかすり状となる。硬化葉でも増殖・加害するので、多発した場合は光合成が阻害されると同時に落葉を生じる。

ブドウのフタテンヒメヨコバイの被害に似る。

3 防除対策

(1) 本種は、成虫・幼虫ともに各薬剤に対する感受性は比較的高く、神奈川県園芸試験場の薬剤試験によればディプレックス乳剤、スカウトフロアブル、アグロスリン乳剤、スプラサイド水和剤で同時防除ができる。

(2) 未発生地では発生地からの採穂や苗の持ち込みに注意する。

(3) 成虫は黄色に誘引されるので、黄色粘着板で発生の有無、発生量を把握できる。  
また、雄の成虫は予察灯(100W水銀灯)にも飛来する。